



会社ご紹介資料

2026年10月版

株式会社キャンバス
(東証グロース 4575)

はじめに～ご挨拶

当社は「がんを治したい」という思いをもとに2000年1月に創業して以来、一貫して、独自の抗がん剤候補化合物を自社で創出し臨床開発を進めています。

最先行の候補化合物・免疫着火剤CBP501は、膵臓がん3次治療対象の臨床第2相試験に成功(主要評価項目達成)した後、米国規制当局から受けた第2b相試験開始承認をペンディングし、現在は欧州での臨床第3相試験に向けた開始申請と試験開始準備を進めています。

欧州臨床第3相試験開始承認取得の見通しについては、取得可能性と時期に分けて不確実性をお伝えしています。取得時期に関しては未だ不確実性が大きく明確にお伝えできないものの、開始承認取得自体の不確実性は、薬剤製造に関する規制への適合や当局審査などが進捗し着実に低減しています。引き続き最優先で、最速・最善での進行を目指す方針に変わりありません。

後続パイプラインである可逆的XPO1阻害剤CBS9106は、2025年6月に提携を解消し全権利の返還を受けました。今後の開発方針は、追加で実施する基礎研究の成果や会社の財務状況などを勘案して決定します。

現在は、次世代の臨床開発パイプラインを創出する基礎研究から創出した免疫スイッチ作動薬CBT005の前臨床試験開始を後続パイプライン中の最優先課題として、準備を進めています。

これらのほか、基礎研究・最適化段階のIDO/TDO阻害剤も、日本に続き米国で特許が成立しました。最近では、AI(人工知能)を利用した創薬共同研究も始めています。

一般に、創薬企業による自社創出パイプラインの開発戦略は、製薬企業等との提携によって開発資金の調達や共同開発・開発費負担の軽減を図る「創薬基盤技術型」と、自ら一気通貫で後期開発まで進める「創薬パイプライン型」に大別できます。

当社は、各パイプラインの状況ごとにリスクとリターンを勘案して、最適の事業モデルを選択していく考えです。

私たちは、CBP501については「創薬パイプライン型」で開発可能な財務基盤の確保が当社の中長期的な企業価値最大化に最も適していると判断しています。

他のパイプラインについても、それぞれの特徴に合った開発方針・事業モデルを選択してまいります。

当社のような研究開発段階の創薬企業の価値向上はひとえに、適切な適応疾患領域における開発の進捗によってもたらされます。

私たちは、適時的確な情報開示を徹底しつつ、株主・投資家の皆様のご支援にお支えいただき、今後もスピード感を持って研究開発や事業開発・広報に取り組み、その成果が正当な企業価値に適切かつ速やかに反映されるよう邁進します。

皆様には引き続き一層のご支援ご鞭撻を賜りますようお願い申し上げます。

2026年10月
株式会社キャンバス 代表取締役 河邊拓己



キャンパスの 企業価値と成長可能性の源泉

有望な最先行化合物CBP501

- 作用機序 **免疫コールド→ホット**
- 化合物や会社の特徴に合った初期開発対象 **膵臓がん3次治療**
 - ✓ 承認された既存治療なし・免疫チェックポイント阻害抗体が効きにくい
- ✓ 3剤併用臨床第2相試験で得られている **有望な臨床データ**
- 欧州臨床第3相試験申請の進捗
 - ✓ オーフアンドラッグ指定、欧州規制当局との相互理解と審査の着実な進行

後続パイプラインと、今後も継続的に新薬候補を創出する体制

- CBT005（前臨床試験準備中） CBS9106（臨床第1相終了） CBP-A08など
- **がん免疫**に着目した深い知見の蓄積
 - ✓ 基礎研究と臨床開発との少人数・緊密な連携サイクル

足もとのトピック

CBP501 欧州臨床第3相試験申請

欧州開始申請に時間とコストがかかった背景

欧州薬事規制への対応

- 米国とのそもそもの違い
- 2022年～24年 治験薬の製造に関するガイドラインなどの規制強化

対応の試行錯誤

- 過去の米国臨床試験の製造委託先の欧州対応支援
 - ✓ 規制の「思想」レベルでの対応に困難
- 欧州で実績のある製造委託先へ切替
 - ✓ 技術移転そのもののリスク
 - ✓ 製造製剤化ラインの空き状況など

欧州臨床第3相試験開始申請と準備の状況

➤ ふたつの不確実性の現状

- ✓ **開始承認獲得の不確実性**：顕在化のおそれは規制当局審査の進捗などで着実に低下
- ✓ **獲得時期の不確実性**：当社でコントロール不能な不確実性が現在も存在
 - 薬剤製造に関連する欧州規制対応、当局による確認など
- ✓ 開始承認受領後に試験を円滑・迅速に開始するための準備も継続、進展続く
 - 臨床試験実施施設との連携、欧州規制当局との相互理解の進行など
- ✓ **時期以外**でも状況が悪化すれば米国試験への移行を検討するが**現状その兆候なし**

➤ 臨床第3相試験費用見通し

- ✓ 45-50億円の見通しに現時点で変更なし・一部は申請準備の中で先行支出済み

➤ ダラクソンラシブの登場による試験への直接的影響はおそらく軽微

- ✓ 対照群（医師最適選択）にダラクソンラシブが入る可能性は今のところないと考えている

会社概要とビジネスモデル

キャンバスは、自社創出・複数の臨床開発パイプラインで
ブロックバスター* を狙える新規抗がん剤を研究開発している**創薬企業**です

* 年間の売上高が10億ドル（約1500億円）を超える画期的新薬

- 会社名 株式会社キャンバス
英文名： CanBas Co., Ltd.
証券コード： 4575
- 代表者 河邊 拓己 （代表取締役社長 M.D., Ph.D.）
- 本社 静岡県沼津市大手町2-2-1
- 設立 2000年1月18日
- 事業内容 抗がん剤の研究開発
- 従業員 19名
うち 研究開発部門 14名（派遣等による専従者1名含む）
管理部門 5名

経営チームメンバー

マネジメントチーム



河邊拓己（かわべ たくみ）代表取締役社長

内科医、医学博士。京都大学大学院分子医学系専攻修了（免疫研究所所属）。京都大学ウイルス研究所助手、ワシントン大学（セントルイス）で博士研究員として勤務。名古屋市立大学医学部分子医学研究所で助教授在任中、科学創業者として当社創業に参画。2001年当社取締役就任を経て2003年から代表取締役社長。



加登住眞（かとずみ まこと）取締役最高財務責任者兼経営企画室長

日本合同ファイナンス（現ジャフコグループ）で投資営業部門と企画部に従事した後、2000年にバイオ特化VC・MBLベンチャーキャピタルの設立に参画。同VC常務取締役として多数の国内バイオ企業への投資を実行。同VCの投資先であった当社へ2005年に転籍、取締役CFO就任。



坂本一良（さかもと かずよし）取締役管理部長

チェースマンハッタン銀行東京支店、NIFコーポレートマネジメント取締役を経て、2008年に当社入社。2010年取締役経営企画部長就任、2020年から取締役管理部長。



日比野敏之（ひびの としゆき）研究開発部長

中外製薬で臨床開発等に携わった後に金融業界へ転じ、三菱UFJ証券（現三菱UFJモルガン・スタンレー証券）および三井住友アセットマネジメント（現三井住友DSアセットマネジメント）で医薬品セクターアナリストを歴任。2020年当社に入社、研究開発部長。

取締役監査等委員

小宮山靖行（こみやま やすゆき）

住友銀行（現三井住友銀行）勤務を経て社会保険労務士として2004年に独立。2016年社会保険労務士法人みくりや社中を設立、代表就任。2016年に当社取締役監査等委員就任。

白川彰朗（しらかわ あきら）

日本合同ファイナンス（現ジャフコグループ）、ジャフコ公開コンサルティングでVC投資とIPOコンサルティングに従事した後、1998年インテリジェント・キャピタルゲイトを創業し社長就任。2006年当社非常勤監査役就任、2016年に取締役監査等委員就任。

古田利雄（ふるた としお）

篠崎芳明法律事務所（現篠崎・進士法律事務所）を経て1993年古田利雄法律事務所（現弁護士法人クレア法律事務所）を設立し代表弁護士就任。2007年当社非常勤監査役就任、2016年に取締役監査等委員就任。モダリス取締役監査等委員を兼任。

SAB（科学顧問会議）

Daniel D. Von Hoff, MD, FACP, FASCO, FAACR

Translational Genomics Research Institute (TGen) 臨床ゲノミクス・治療学 特別教授
Mayo Clinic 教授
Virginia G Piper Distinguished Chair for Innovative Cancer Research (HonorHealth 名誉会員)
元FDA Oncology Drug Advisory Committee (ODAC) メンバー
City of Hope研究センター 腫瘍学・治療研究科 特別教授
2002年、当社SAB組成時にチェアマン就任。

Donald W. Kufe, MD

Harvard Medical School 教授
Dana-Farberがん研究所名誉医師
Dana-Farber/Harvard がんセンター NCI Experimental Therapeutics Clinical Trials Network (ETCTN) UM1プロジェクト フェーズ1及びフェーズ2プログラム共同主任研究者
AAP（米国小児科学会）、ASCI（米国臨床研究学会）、SITC（がん免疫療法学会）会員
2002年、当社SAB組成時に就任。

キャンバスの強み (1) 基礎研究と臨床開発の連携サイクル

■ 独自に創出した複数の化合物を臨床開発段階に進めている実績があります

- ✓ 本社に研究所と動物実験施設を有し基礎研究に注力
- ✓ 外部協力機関を効率的に活用し、米国FDA規制・欧州EMA規制下での臨床開発体制構築



がん免疫に着目したパイプライン戦略

中長期の企業価値の源泉として重視

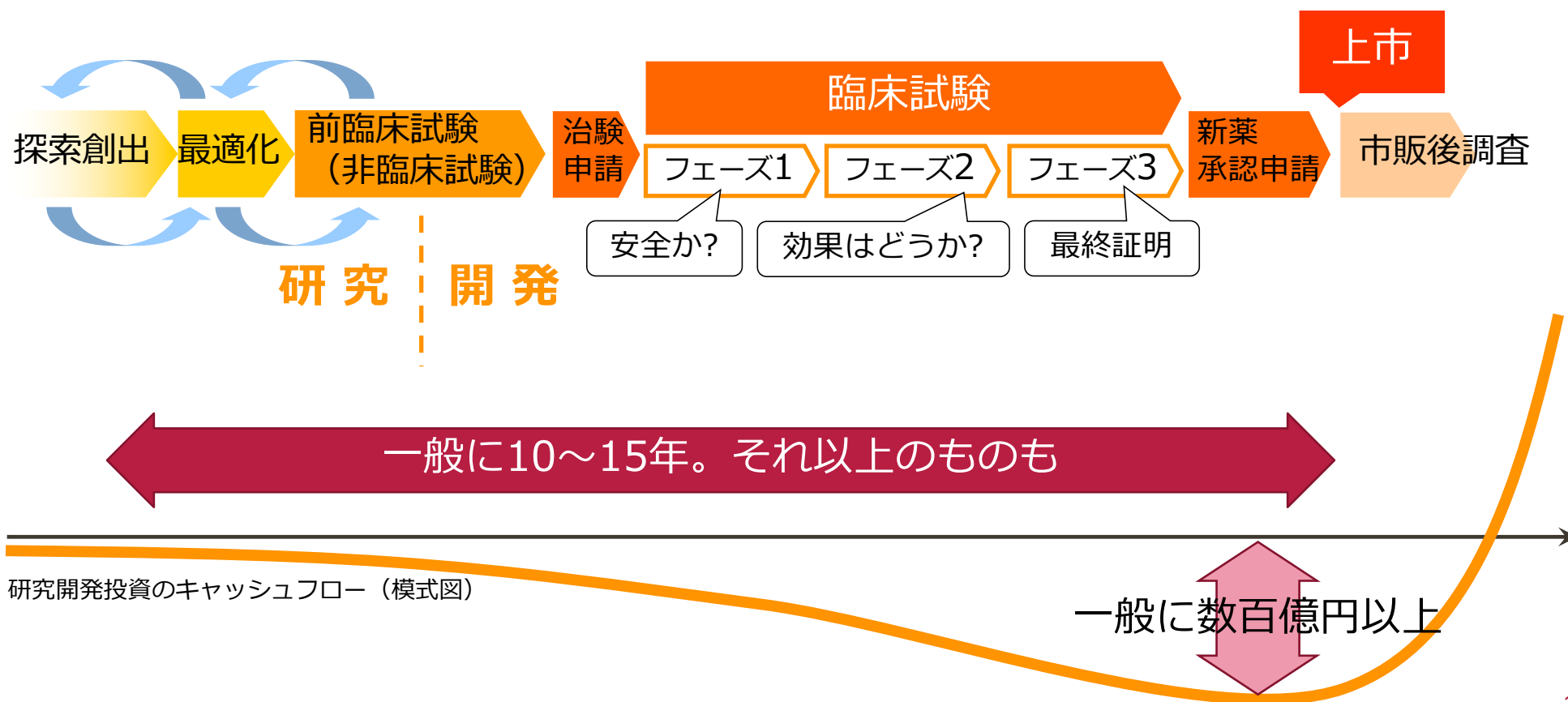
	探索・創出	最適化	前臨床試験	臨床試験	提携・導出 共同研究等
CBP501 創薬パイプライン型展開	第2相試験で主要評価項目達成 米国第2b相試験開始承認取得・欧州第3相試験開始申請				
CBT005 免疫スイッチ作動薬 がんの「治癒」を目指す 新たな免疫系抗がん剤	前臨床試験準備				
CBS9106 可逆的XPI1阻害剤 現在は新開発方針検討中	前臨床試験終了し導出			第1相試験完了	2025年6月 全権利返還
CBP-A08 CBP501の系譜に属する ペプチド型免疫系抗がん剤	最適化終了				
IDO/TDO二重阻害剤 ほか※					静岡県立大学 ほか

※ 上記のほか、がん免疫領域で広く基礎研究を展開しています。

※ IDO/TDO二重阻害剤は、COVID-19（新型コロナウイルス感染症）新規治療薬としての研究も継続

一般的な創薬の流れと開発投資・時間軸

「創薬」の流れ



創薬企業の2つの事業モデル

*二者択一ではなく、それぞれに多様なバリエーションがあります。

研究開発投資のキャッシュフロー（模式図）

創薬パイプライン型
（自社で承認近くまで開発）

創薬基盤技術型
（比較的早期に製薬企業等へ導出）

☒ ポジティブ面

- 後期開発リスク（資金調達含む）を導出先に転嫁
- 一時金・マイルストーンで早めの収益が実現

☒ ネガティブ面

- 開発進行の主導権が導出先へ移行
- 利益分配への発言機会小＝獲得機会・比率の毀損

☒ ポジティブ面

- 化合物を最も知る自社が**開発の主導権**を掌握
- 利益分配への発言機会大＝**リターンの最大化**

☒ ネガティブ面

- 後期開発に伴うリスク（資金調達含む）の保有
- 一時金など収益実現までの期間が長期化

キャンバスは複数の創薬事業モデルを使い分け

■免疫系抗がん剤の基礎研究・創出から後期臨床開発まで、自社で進めた実績があります

■これを活かし、**各パイプラインの特徴に沿った柔軟な開発方針**を想定しています

- 開発パイプラインごとの開発段階・成功確率・費用見込などに沿って使い分け、中長期的な企業価値の効果的な最大化を図ることが可能です。

■各パイプラインの現状の想定と今後

➤ **CBP501**：自社で承認まで開発する**創薬パイプライン型開発**を想定

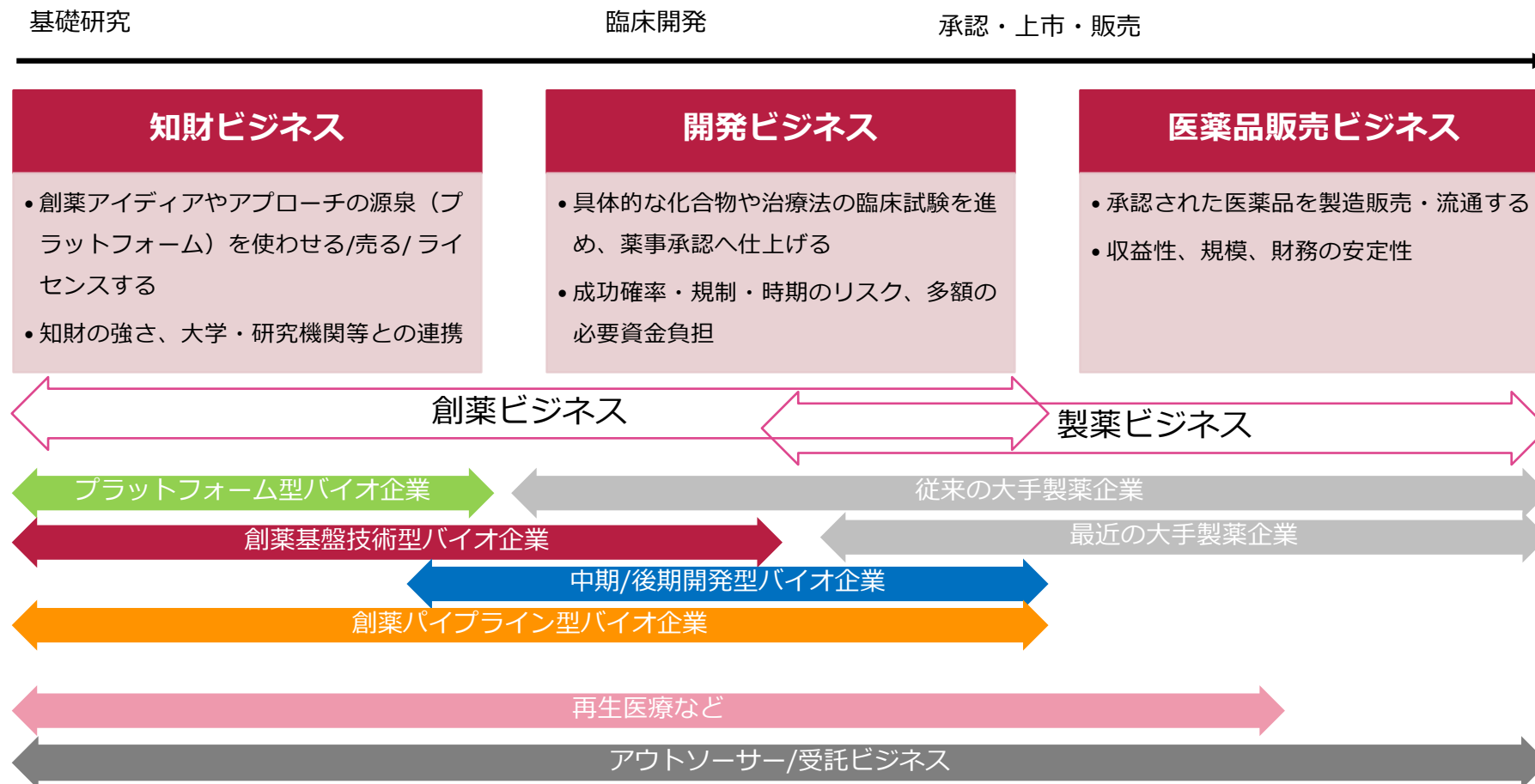
並行して、適応や地域などの部分的導出やアライアンスなども選択肢にできる状況です。

➤ **CBS9106**：**創薬基盤技術型開発**で、前臨床試験段階で導出しました。

2025年6月に全権利の返還を受け、今後は追加で実施する基礎研究の成果等を勘案して開発方針を検討していきます。

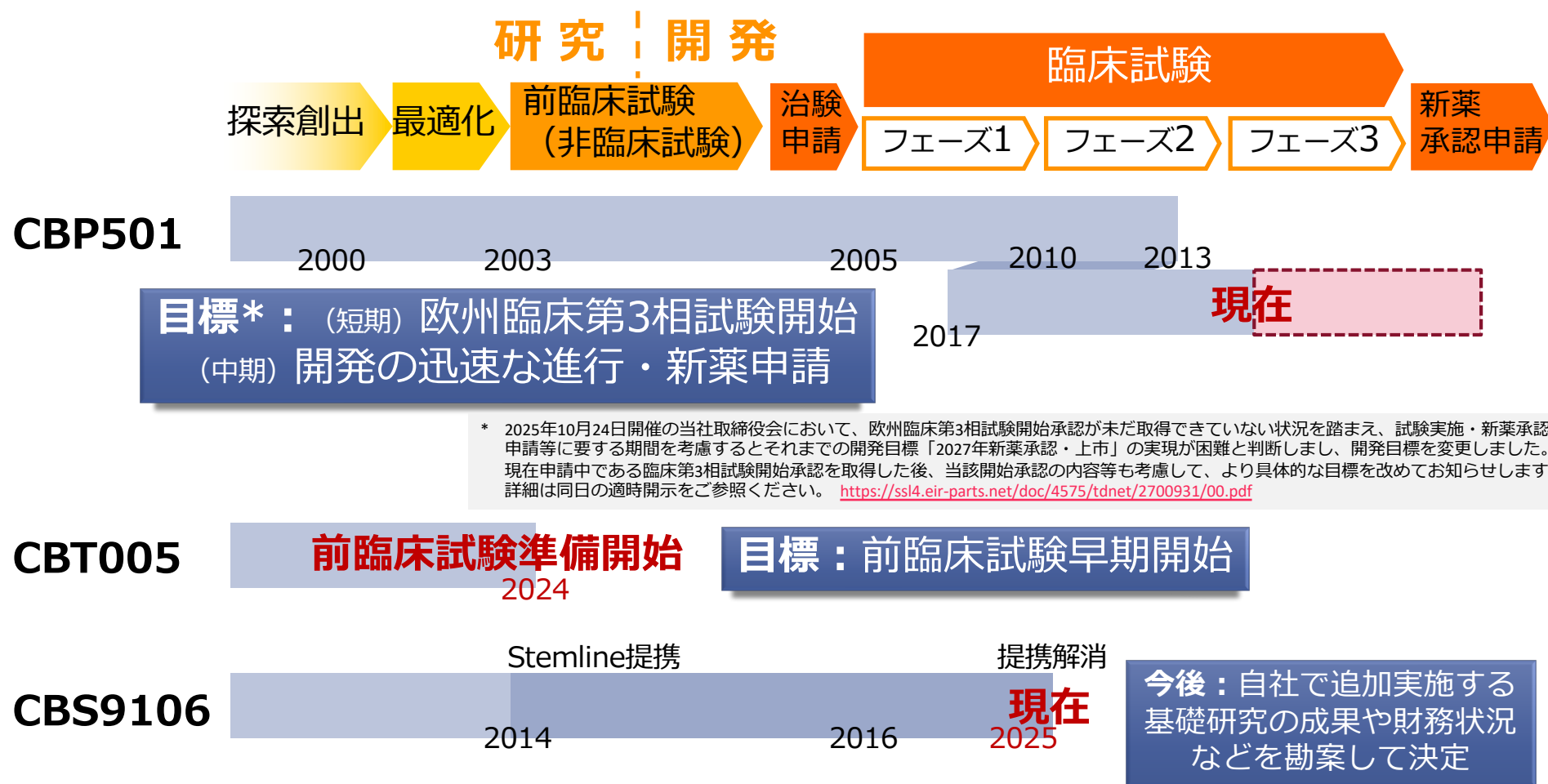
➤ **CBT005**など後続のパイプライン候補も基礎研究の成果として生み出されており、それぞれの特徴に沿った開発方針を検討していきます。

バイオ企業の多様なビジネスモデル



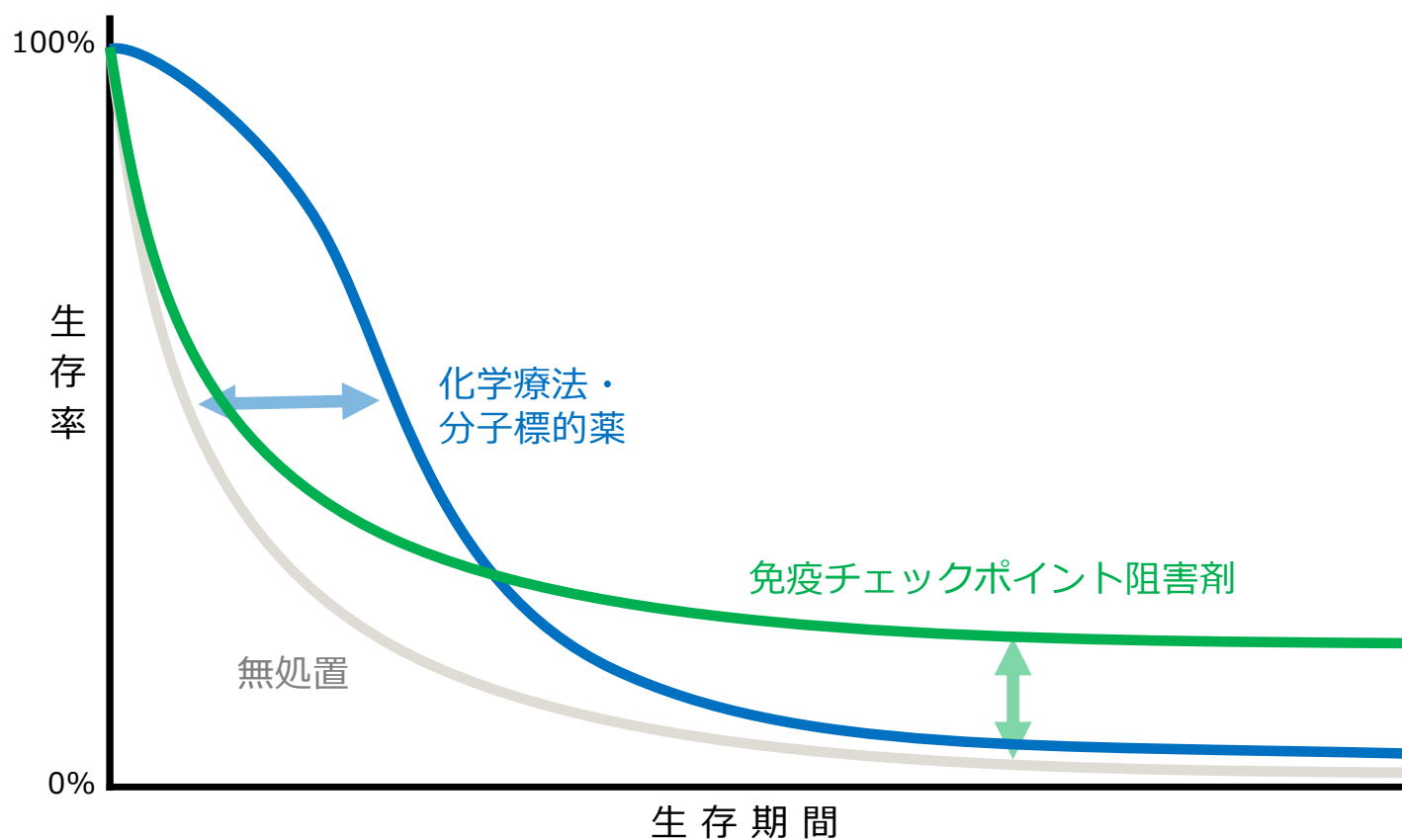
開発パイプラインの状況

各パイプラインの歩み・現状・目標



現在最も先行し注力しているパイプライン
免疫着火剤 CBP501

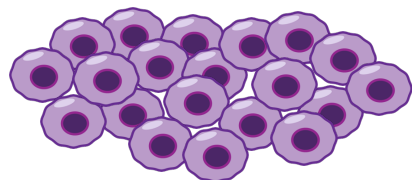
免疫系抗がん剤は一部の患者様に劇的に効く



免疫系抗がん剤の効きにくい「免疫コールド」ながん

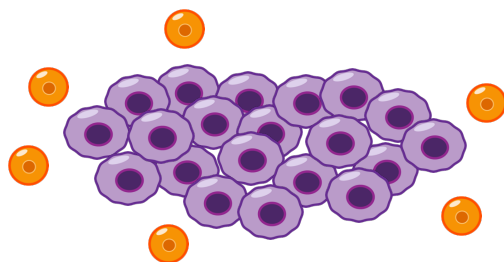
攻撃するための
T細胞がない

免疫砂漠



T細胞ががん組織に
入り込めていない

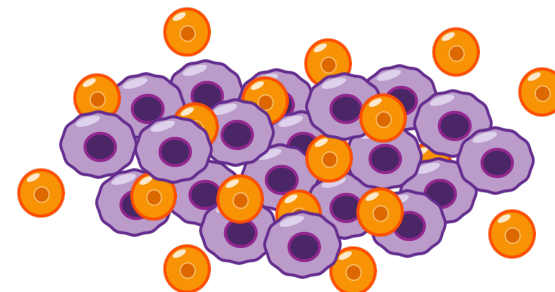
免疫排除



免疫コールドながんを
免疫ホットながんに
変えることが必要

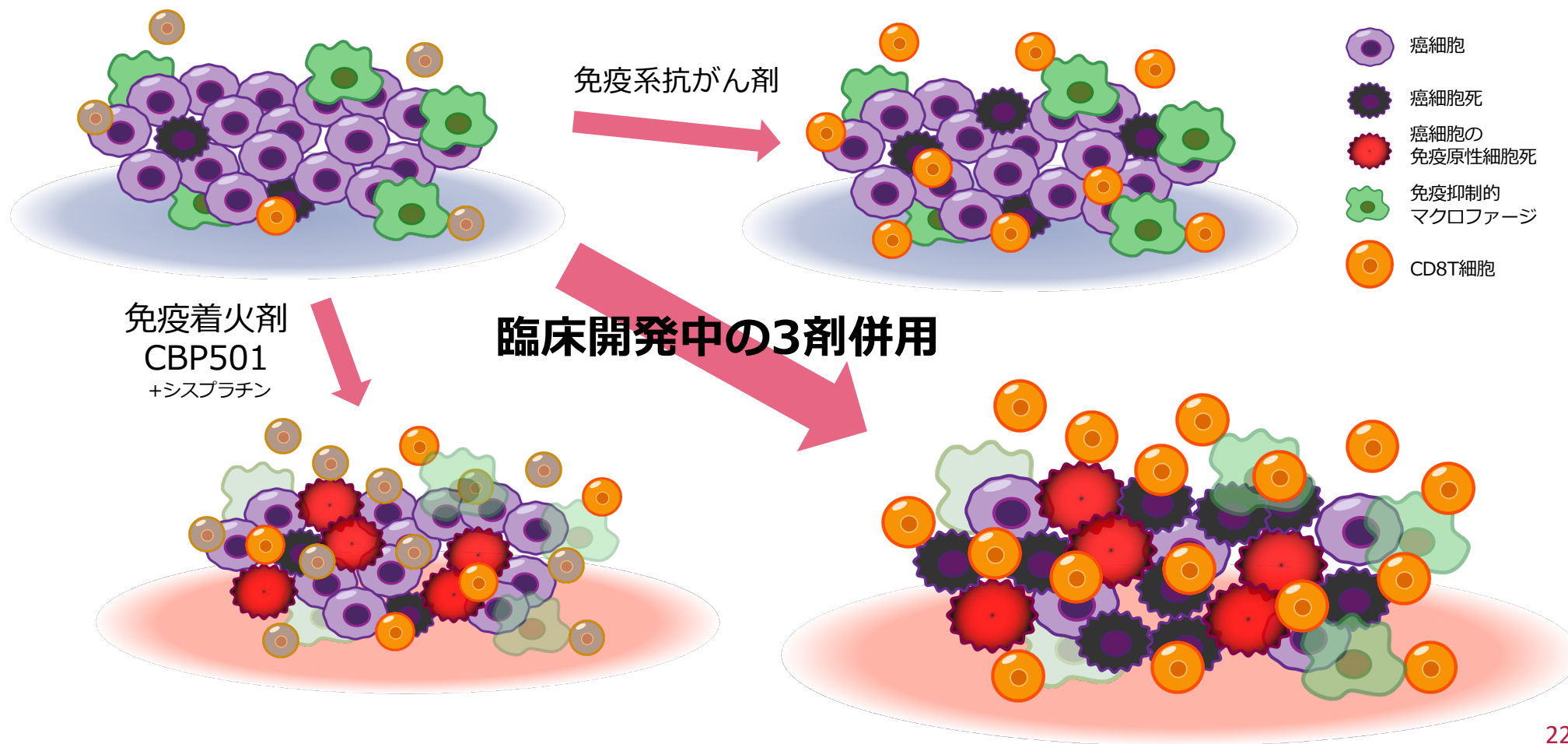
T細胞が十分に
がんを攻撃できる

免疫ホット



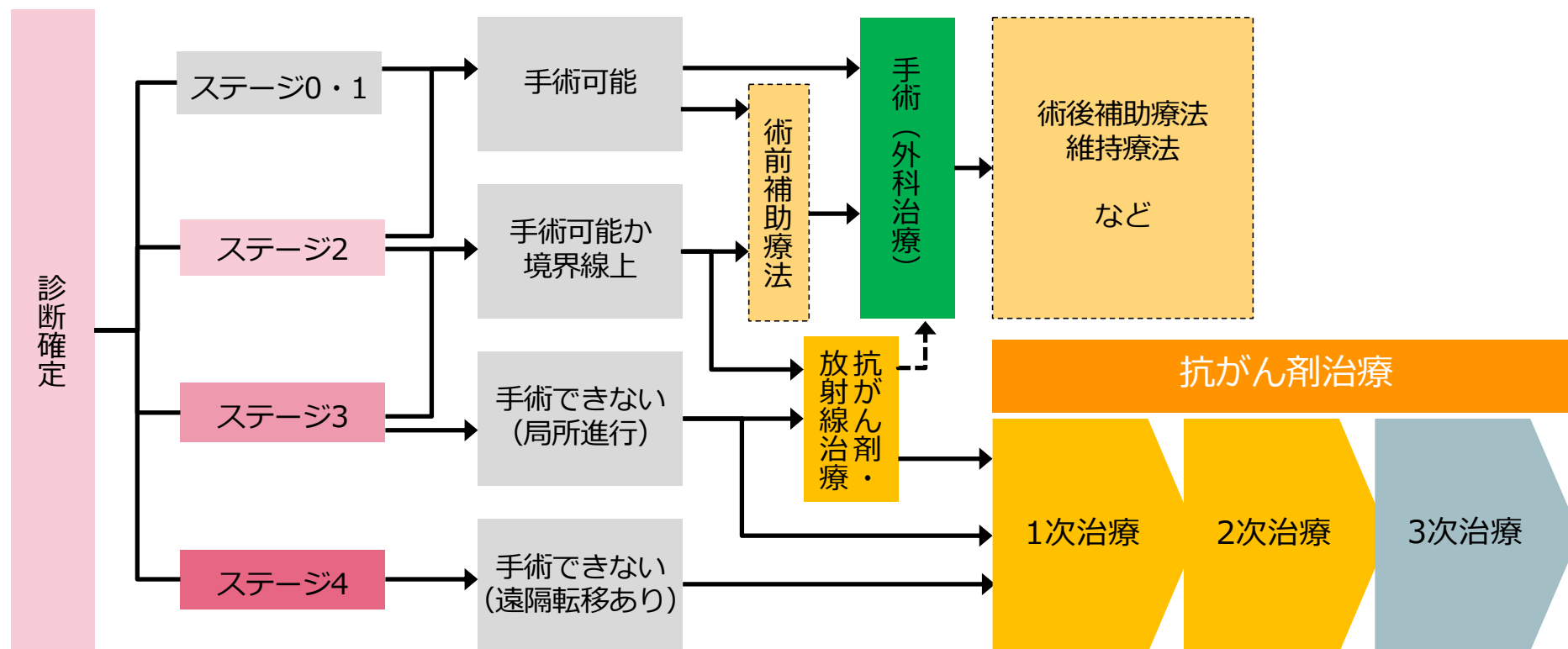
癌細胞 CD8T細胞

CBP501の3剤併用で免疫系抗がん剤を効きやすくする



膵臓がん治療の現状 (1)

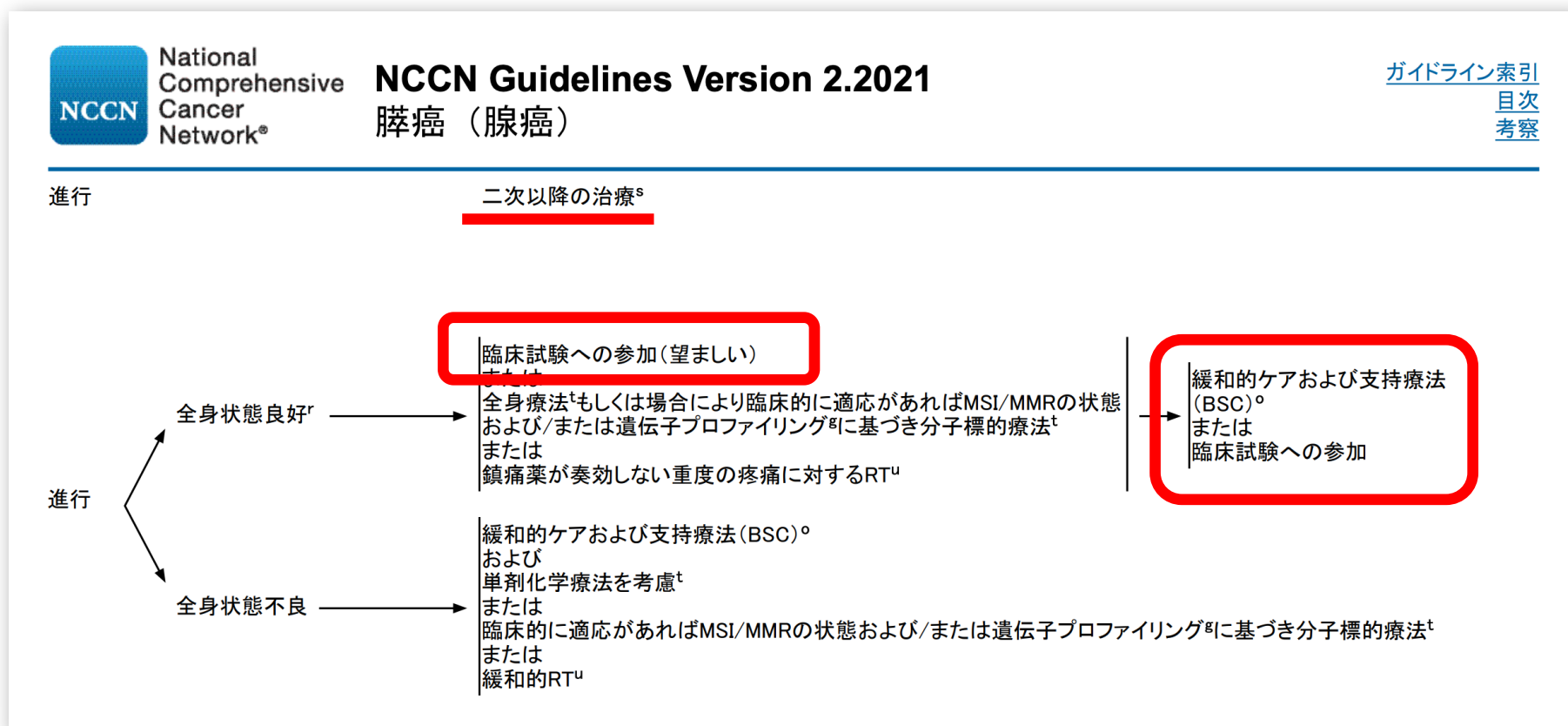
診断ステージと治療の選択フロー（概略図*）



* 一般的な概略を示したものです。具体的な診療及び治療の選択にあたっては、主治医を含む医療チームやがん支援相談センターにご相談ください。

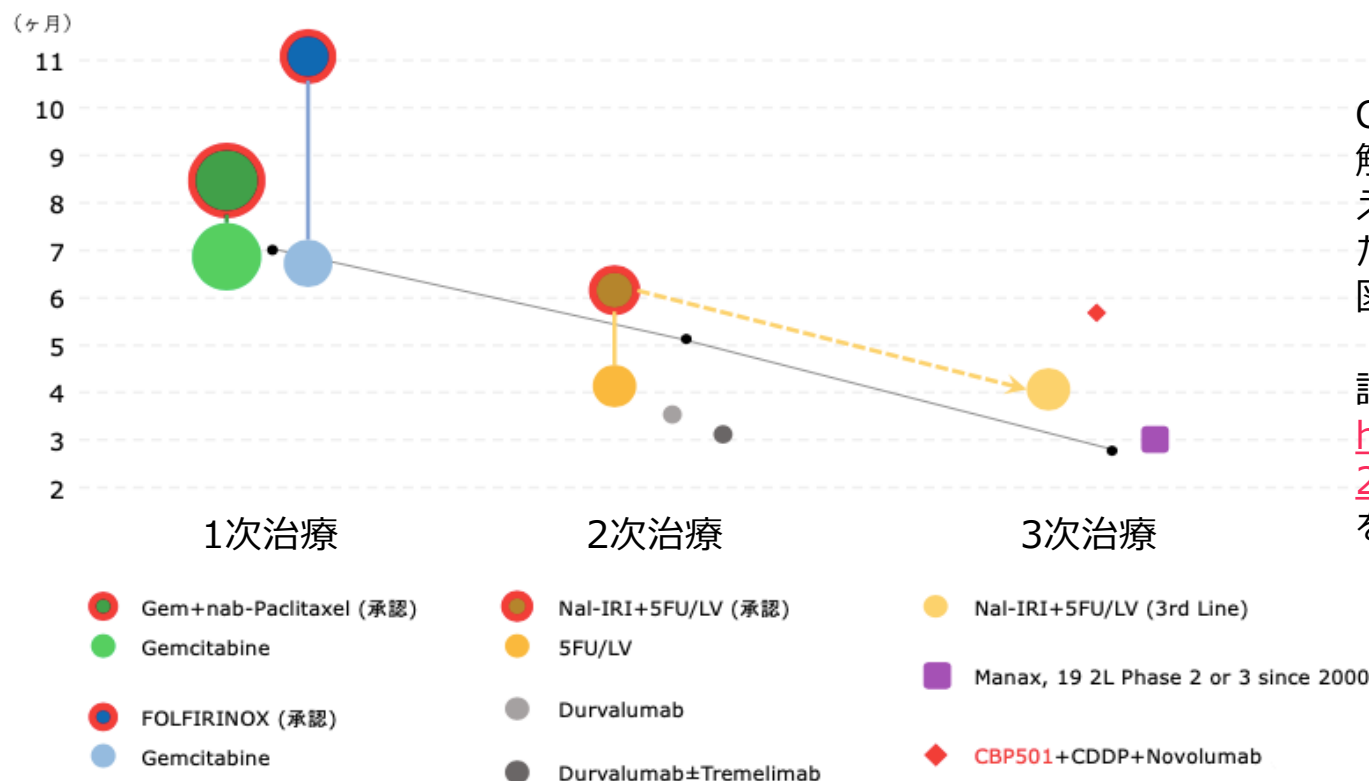
膵臓がん治療の現状 (2)

2次治療を終えた以降に有効な薬剤がなく、新薬の登場が切望されている



CBPフェーズ1b試験のデータ（膵臓がん）

CBP501フェーズ1b試験中間解析 同種の膵臓癌臨床試験結果との比較（全生存期間）



CBP501フェーズ1b試験の中間解析結果を、比較に適すると考えられる他の臨床試験で示された全生存期間（OS）との比較で図示したもの。

詳細説明はブログ
<https://www.canbas.co.jp/20200514/>
をご参照ください。

CBP501 臨床第2相試験の有望な結果

ポスター発表されたCBP501臨床第2相試験結果

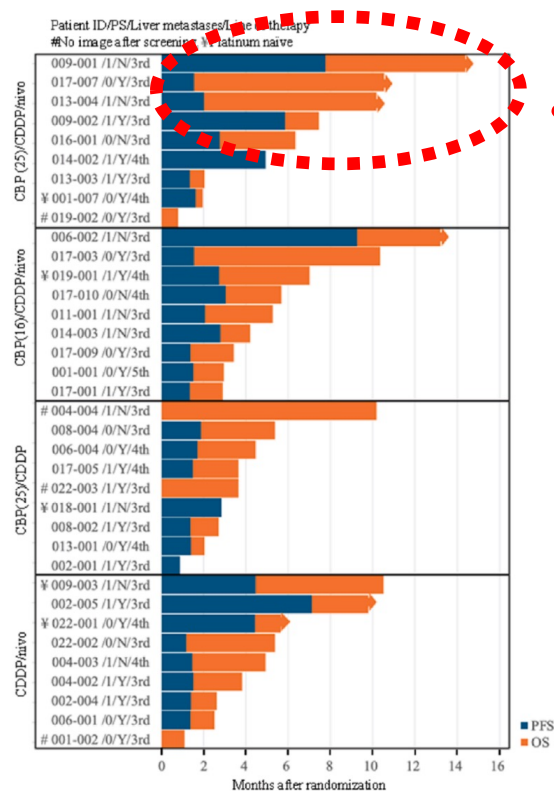
- 主要評価項目 3ヶ月無増悪生存率
 - ✓ 第1群（3剤併用・CBP501 25mg）第2群（3剤併用・CBP501 16mg）で達成
 - ✓ 良好な結果を受け、安全性モニタリング委員会はステージ2に進まないことを推奨
- 副次的評価項目（無増悪生存・客観的奏効率・病勢コントロール率・奏効期間・全生存・安全性）
 - ✓ これらに関する解説は[当社ブログ記事](#)（2023年10月24日）をご参照ください
- 結論

CBP501・シスプラチン・ニボルマブの併用療法は、転移性膵臓腺がんに対する3次治療として、**忍容性のある安全性**で、3ヶ月無増悪生存率、無増悪生存期間および全生存期間において、**持続的な奏効と臨床的に意義のある改善**をもたらした。この化学免疫併用療法は、さらなる検討を進めるべきである

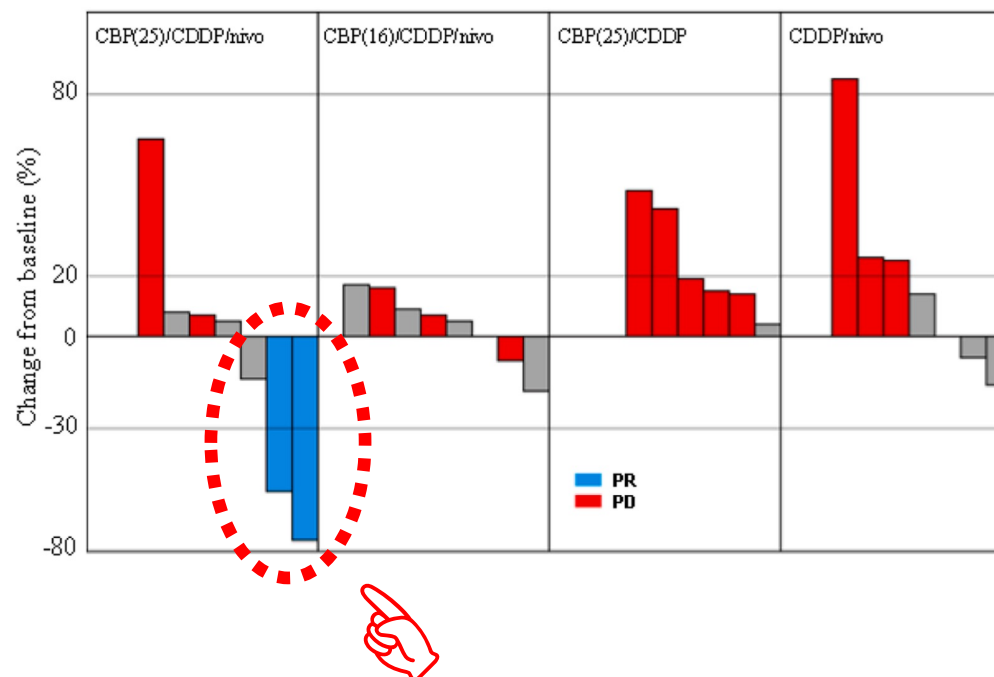
CBP501臨床第2相試験データ(1)

腫瘍増大のない生存期間(PFS)の伸長、生存期間(OS)の伸長、腫瘍サイズの縮小

■ PFSとOSを示すスマイープロット図

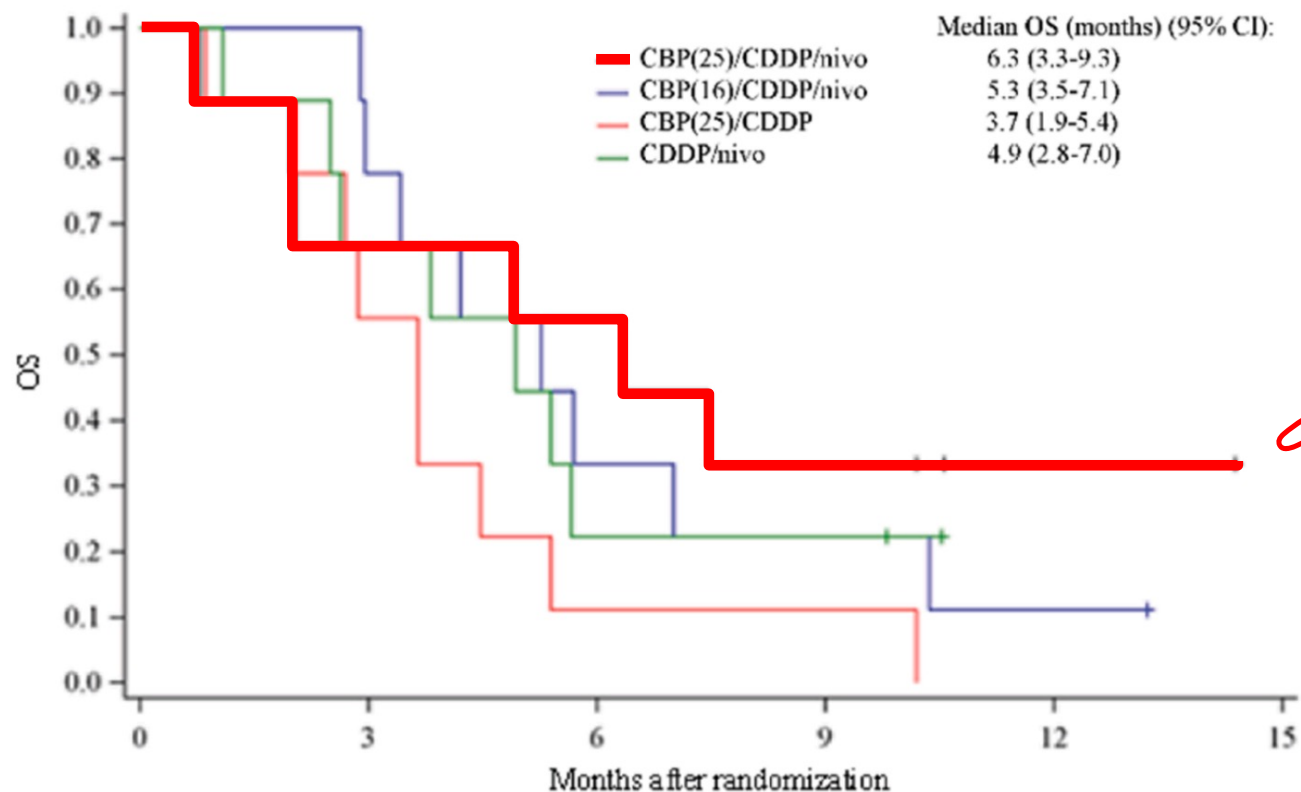


■ 腫瘍の増大/縮小を示すウォーターフォール図



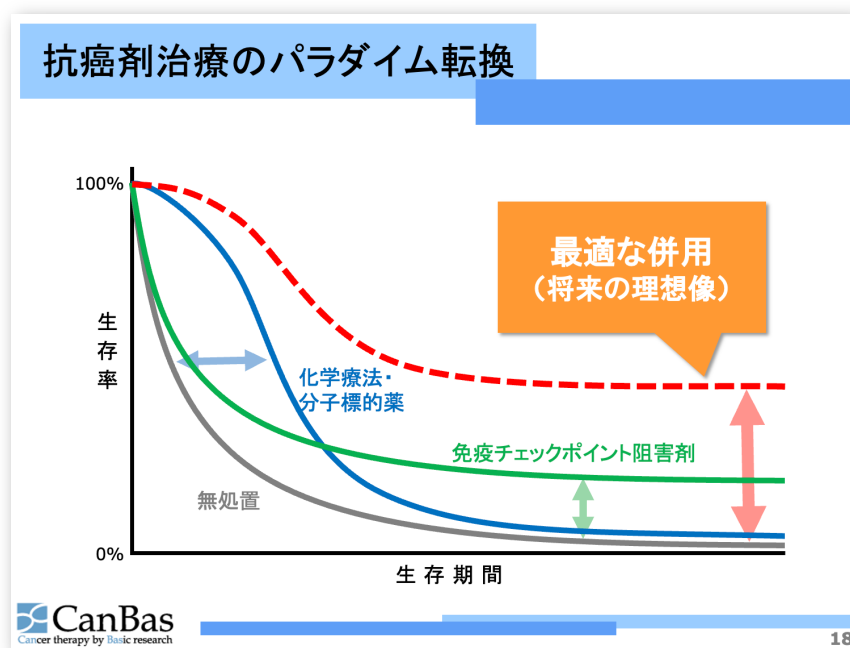
CBP501臨床第2相試験データ(2)

免疫チェックポイント抗体+ α ならではの特徴を示した生存曲線

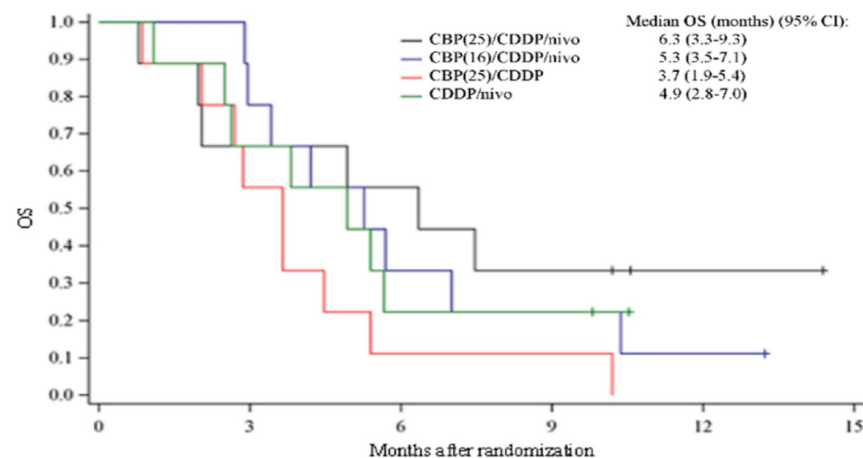


目指してきた「最適な併用」への前進

10年前に当社プレゼンテーション資料で目指した姿に近づいています



2015年8月 「株式会社キャンバス2015年6月期決算説明会資料」



CBP501

パイプライン価値試算のめやす

PERの使えないキャンバスの企業価値を評価する視点

CBP501のパイプライン現在価値

➤ 利益実現までの開発期間・成功確率・不確実性

✓ CBP501臨床第3相試験を完遂できるか

- 欧州臨床試験開始承認獲得の期待（獲得時期/それ以外の不確実性）
- 期間見通し、成功確率、開発環境や開発資金の確保

✓ 新薬承認を獲得できるか

- これまでの良好な臨床試験データ

➤ CBP501上市成功後の利益

✓ 上市成功時の成功規模

- 欧州ほか主要市場の患者数・薬価・シェア、他のがんへの適応拡大の期待
- オフファン指定による欧州10年・米国7年の独占保護



後続パイプラインと、今後も継続的に新薬候補を創出する体制の価値

一般的なパイプライン価値試算の考え方

- ✓ 一般に現在価値は、将来の一定期間の純利益やキャッシュフローを、投資家の想定する割引率で割り戻して算出します。
- ✓ この資料の市場・末端販売高・ロイヤルティの想定等は、上記の方法で試算していただくためのめやすとしてお示ししているものです。
- 創薬パイプライン価値の試算にあたっては、成功確率、成功までに要する期間、必要な投資額（臨床試験費用）等にご留意いただく必要があります。

CBP501の想定市場

- ベストシナリオにおいては、欧州臨床第3相試験の結果をもとに欧州だけでなく米国にも同時申請を想定しています。
- このため、本資料におけるCBP501の想定市場は米国を併記しています。

CBP501のパイプライン価値 (1)

膵臓がん3次治療領域におけるCBP501の位置

- 既存先行品は市場に存在しない = **市場がまだない**
 - ✓ 積み上げによる市場規模想定が必要
- 競合の開発中止が続き、CBP501は依然トップランナーの位置にいる

膵臓がん治療開発全体におけるCBP501の位置

- **2次治療**を対象とする新薬ダラクソンラシブが米国で承認・欧州で承認審査中
 - ✓ 耐性ができる課題は解決されていない → 3次治療の対象となる患者数の増加が期待される
 - ✓ 2次治療の標準となった後には、3次治療は既存1次・2次承認薬との競争に変化も
 - ✓ CBP501が承認され上市した場合も、いわゆる「競合」になるとは考えていない

CBP501のパイプライン価値 (2)

上市後の市場規模（一般的な検討要素をもとに当社試算）

➤ 当初の市場と想定される米国のみで**ピーク時9億ドル**の収益を見込む

膵臓癌 3次治療 米国患者数	年間4.7万人以上 ^{*1}
×	
薬物治療を選択する患者の割合	20%~70% ^{*2}
×	
来院しない患者を考慮	80%程度が来院を継続 ^{*3}
×	
CBP501の獲得するシェア	ピーク時のシェア60% ^{*4}
×	
投与期間	4カ月以上 ^{*5}
×	
ひと月の薬剤費	2万ドル前後 ^{*6} （オニバイドを参考）

^{*1} The International Agency for Research on Cancer(IARC), GLOBOCAN2018

^{*2} Anticancer Research, 2007; 27(4A):1789-1794
Oncologist, 2017; 22:925-933
Cancer Res Clin Oncol, 2019; 145: 445-455
Cancer Med, 2020; 9:8480-8490

^{*3} J Clin Oncol, 2010; 28:2381-2388

^{*4} 他の抗がん剤のピーク時シェアを参考に自社想定

^{*5} Therapeutics and Clinical Risk Management, 2018; 14:1691-1700 およびCBP501のP1b臨床試験結果から自社推計

^{*6} 膵臓がん3次治療に対する標準薬剤は存在しないため、直近で膵臓がん領域で新薬承認された2次治療の薬剤であるオニバイドを参考薬剤として自社推計に使用。
厚生労働省中央社会保険医療協議会総会2020年5月13日資料のオニバイドの数値とAmerican Society of Health-System Pharmacists (ASHP)
「2週間に1回投与・1回あたり薬剤費10,000ドル前後」

CBP501のパイプライン価値 (3) 欧州市場

CBP501欧州上市後の市場規模（一般的な検討要素をもとに当社試算）

➤ 欧州（英国含む）市場でピーク時5.5～9億ユーロと推定

膵臓がん3次治療 患者数	年間6～10万人推定 ^{*1}
×	
薬物治療を選択する患者の割合	20%～70% ^{*2}
×	
来院しない患者を考慮	80%程度が来院を継続 ^{*3}
×	
CBP501の獲得するシェア	ピーク時のシェア60% ^{*4}
×	
投与期間	4カ月以上 ^{*5}
×	
ひと月の薬剤費	0.9～1万ユーロ ^{*6}

^{*1} ECIS(European Cancer Information System) Globocan 2022 data (EU27カ国、2022年)の膵臓がん罹患患者数・死亡者数をもとに3次治療患者数を当社推定。出典・推定時期・推定方法が異なるため、p.43とは一致しないことに留意

^{*2} Anticancer Research, 2007; 27(4A):1789-1794
Oncologist, 2017; 22:925-933
Cancer Res Clin Oncol, 2019; 145: 445-455
Cancer Med, 2020; 9:8480-8490

^{*3} J Clin Oncol, 2010; 28:2381-2388

^{*4} 他の抗がん剤のピーク時シェアを参考に当社推定

^{*5} Therapeutics and Clinical Risk Management, 2018; 14:1691-1700 およびCBP501のP1b臨床試験結果から当社推定

^{*6} 膵臓がん3次治療に対する標準薬剤は存在しないため、直近で膵臓がん領域で新薬承認された2次治療の薬剤であるオニバイドを参考薬剤とし、同薬剤のEU・英国それぞれのインターネット販売価格をもとに、“2週間に1回投与・1回あたり薬剤費4,500～5,000ユーロ”と当社推定

CBP501のパイプライン価値 (4) 将来の対象拡大

初期適応は小さいものの長期的な投与対象患者数（適応・地域拡大後）は大きく、
日米欧で年間50万人以上を対象にできる可能性も

→ 地域の拡大

	米国	欧州	日本	アジア	南米など
膵臓がん 3次治療	4.7万人	3万人以上	3.7万人	11万人 (中国のみ)	
膵臓がん 1次～2次治療	5万人以上	4万人以上	4.3万人	11万人 (同上)	
大腸がん	10万人のうち PD-1不能例など	2万人以上	5万人のうち PD-1不能例など	14万人のうち PD-1不能例など	
肺がん	22万人のうち PD-1不能例など	5万人以上	11万人のうち PD-1不能例など	77万人のうち PD-1不能例など	
悪性胸膜中皮腫 など					

↓
適応の
拡大

CBP501のパイプライン価値 (5) 市場浸透を加味

CBP501のパイプライン価値試算のめやす

➤ 上市後一定期間の末端販売高の推移想定

(単位：億ドル)

	2027+X(Y1)	Y2	Y3	Y4	Y5	Y6
末端販売高	4.0	5.0	5.7	6.2	7.0	7.5

※目標シナリオでの上市（2027年）からX年経過し、市場浸透が進むもののピークには未だ達しない6年間を想定したものです。

➤ ロイヤルティ

	Y5	ピーク時
ロイヤルティ%	開発最終段階での提携。40～80%を目指す	
ロイヤルティ収入	2.8～5.6	3.6～7.2

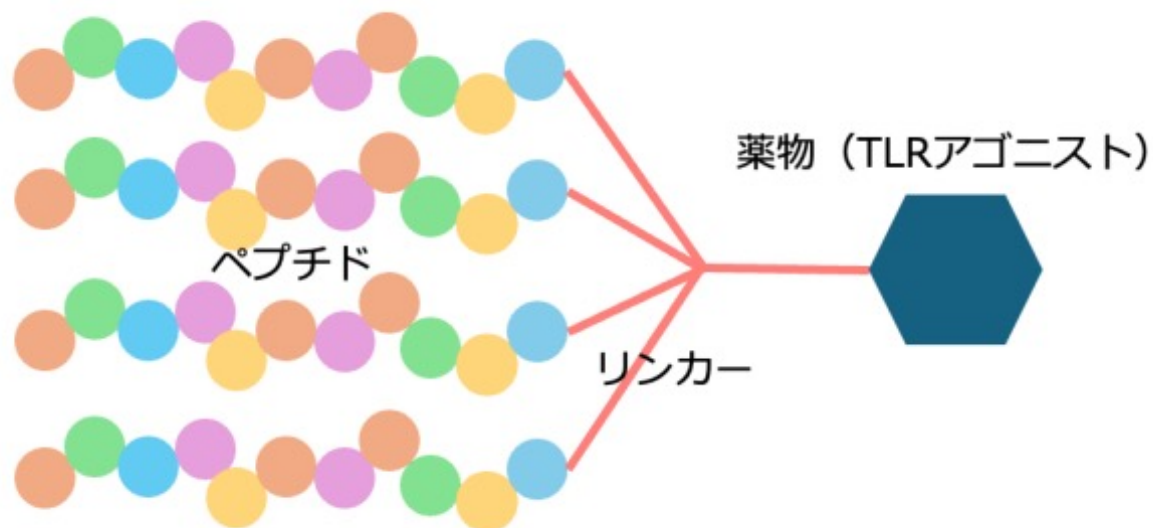
※開発最終段階で米国において提携先に販売委託、ロイヤリティ収入・現金収入の獲得を想定したものです。

※適応や地域などの部分的導出や、原薬・最終製剤を提供するなどの付与契約等によっても変動の可能性があります。

免疫スイッチ作動薬 CBT005

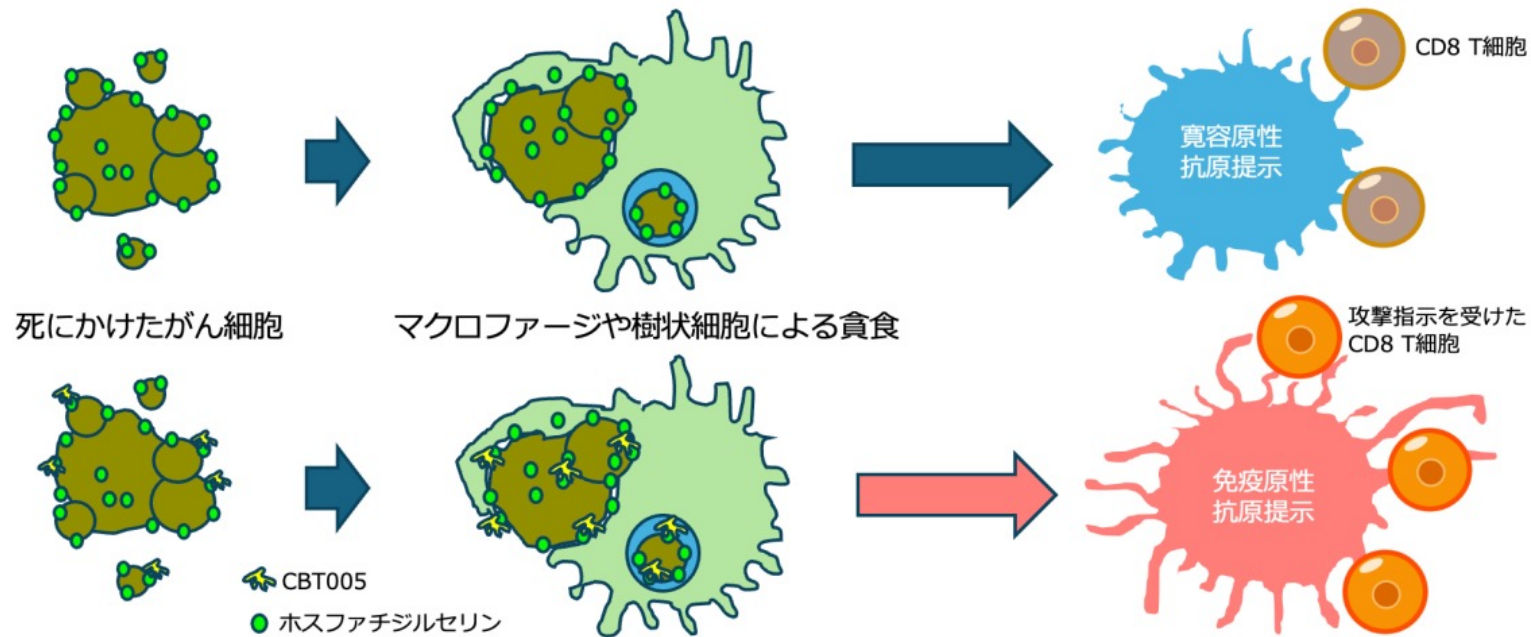
■ ホスファチジルセリンに結合するペプチド4つと
薬物をリンカーで結合させた**PDC** (Peptide-Drug Conjugate)

- 狙い：死にかけたがん細胞の新生抗原を利用して免疫スイッチを切替える
- 模式図



免疫スイッチ (ImmunoSwitch)

- 抗原提示細胞のTLRを活性化し、T細胞への指示を「**攻撃する**」に切替える
《想定している作用機序》



現在：前臨床試験準備中

- 前臨床試験（臨床試験開始承認に必要な非臨床試験パッケージ）に向けた大量合成
- 大量合成準備と並行し、さらなる改善（仮称：CBT006）も検討
 - ✓ 他社で予想と異なる状況が生じているTLRアゴニスト臨床試験報告から考え得る改善
 - ✓ 後期臨床試験以降の規制対応（難度、コストなど）を見据えた改善

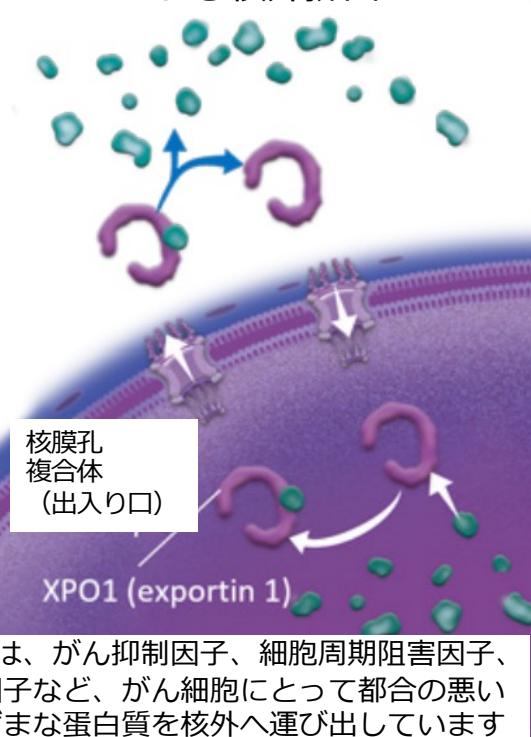
今後の展開

- 前臨床試験の早期開始を目指す
- 改善の成果があればCBT006を候補選定する可能性も
 - ✓ 大量合成準備などへの影響は軽微

可逆的XPO1阻害剂 CBS9106

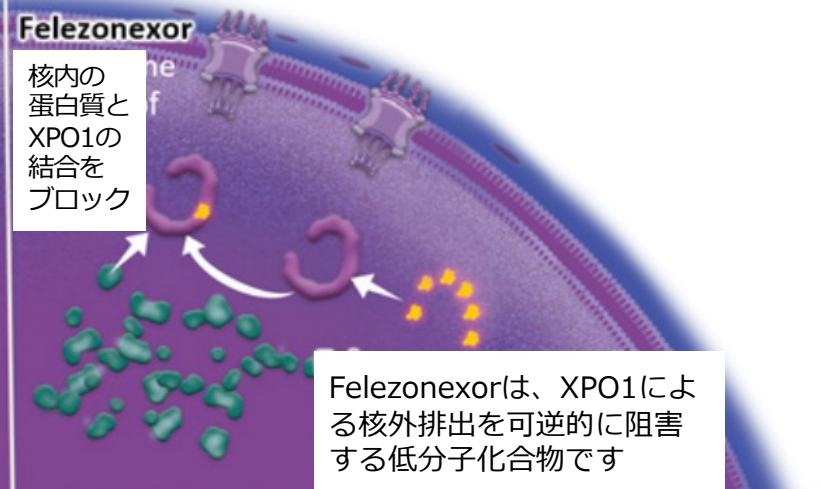
XPO1阻害による抗がん活性のしくみ

XPO1による核外排出



Felezonexor (CBS9106) によるXPO1阻害

Felezonexorは、がん細胞の細胞周期停止とアポトーシスを誘導することが示されており、固形がんおよび血液がんに対する傷害性を有します



※ESMO2020(European Society for Medical Oncology、欧州臨床腫瘍学会、2020年大会) ポスター発表

CBS9106の優位性

■ 臨床第1相試験を有望なデータとともに終了

■ 「安全性」「有効性」「使いやすさ」でXPO1阻害剤の**ベスト・イン・クラス**へ

➤ 上市済みのXPO1阻害剤：XPOVIO(Selinexor) 米国Karyopharm社

適応：びまん性大細胞B細胞性リンパ腫・多発性骨髄腫

✓ XPOVIOは副作用が多く、適応も血液癌の一部に限られている

直近の臨床試験（STORM study、多発性骨髄腫対象）

・・・89%の患者でグレード3以上の重篤な副作用報告、少なくとも2例の死亡報告

➤ CBS9106の優位性

✓ 安全性：最大耐用量の高さ（Stemline社による臨床第1相試験、ESMO2020報告）

・・・背景には、CBS9106のXPO1分解作用* による副作用の小ささ

✓ 有効性：複数の固形がんで薬効の兆候（Stemline社による臨床第1相試験、ESMO2020報告）

✓ 使いやすさ：臨床現場で使いやすい経口剤

* CBS9106は、XPO1による基質輸送を阻害したあと、XPO1を分解することがわかっており、細胞は新たなXPO1を産生して正常な機能を保とうとするため、副作用の小ささが期待できる。

CBS9106 ライセンス契約解消・全権利返還と今後

Stemline社とのライセンス契約経過

- 2014年12月 日中台韓を除く全世界を対象にライセンス導出
- 2018年8月 ライセンス対象地域を上記地域を含む全世界へ拡大
- 2025年6月 ライセンス契約を解消し、開発及び商品化に関するすべての権利が当社に返還

ライセンス契約に基づき受領済みの収益

- 契約一時金・・・2014年12月 10百万円、2018年8月 5百万円 それぞれ受領済
- 技術アドバイザリーフィー・・・2014年12月～2021年6月 累計702百万円 受領済

今後の展開

- 返還手続き終了後、当社は具体的な臨床開発計画を策定するための基礎研究を実施
(基礎研究費予算の範囲で実施するので短期的な業績への影響なし)
- 今後、追加で実施する基礎研究の成果や会社の財務状況などを勘案して、開発方針を検討

その他の研究開発 前臨床試験までの段階のプロジェクト

基礎研究～非臨床試験段階のプロジェクトの状況

基礎研究～前臨床試験準備段階のパイプライン (ピックアップ)

➤ IDO/TDO二重阻害剤

- ✓ 静岡県立大学と共同研究で最適化を進行中
- ✓ 日本・米国で特許成立（2023年6月6日・2024年9月10日公表）
- ✓ ファルマバレーセンターによるアライアンス活動開始（2025年4月2日公表）

➤ CBP-A08

- ✓ 最適化を完了し、財務状況等を勘案し前臨床試験開始を模索

➤ NEXTプロジェクト

- ✓ 新たなコンセプトの免疫系抗がん剤候補化合物の探索創出
- ✓ インテージヘルスケアとAI（人工知能）を利用した創薬共同研究（2024年12月25日公表）

➤ 抗がん剤感受性予測システム

2026年6月期決算・財務の状況

2026年6月期の業績 (1)損益計算書

2026年6月期損益計算書のポイント

- 事業収益計上なし
- CBP501臨床開発（主に臨床第3相試験開始申請と規制対応）を中心に研究開発先行投資
 - ✓ 事業費用 1,358百万円の内訳：基礎研究費*1 226百万円 臨床開発費*2 830百万円 販管費 301百万円
基礎研究費と販管費は前年比微増。臨床開発費の大半はCBP501欧州臨床第3相試験の開始申請と規制対応に関連する費用で、特に製造製剤化に関する規制対応で支出増。
 - ✓ 営業外損益（主に為替差益） 50百万円

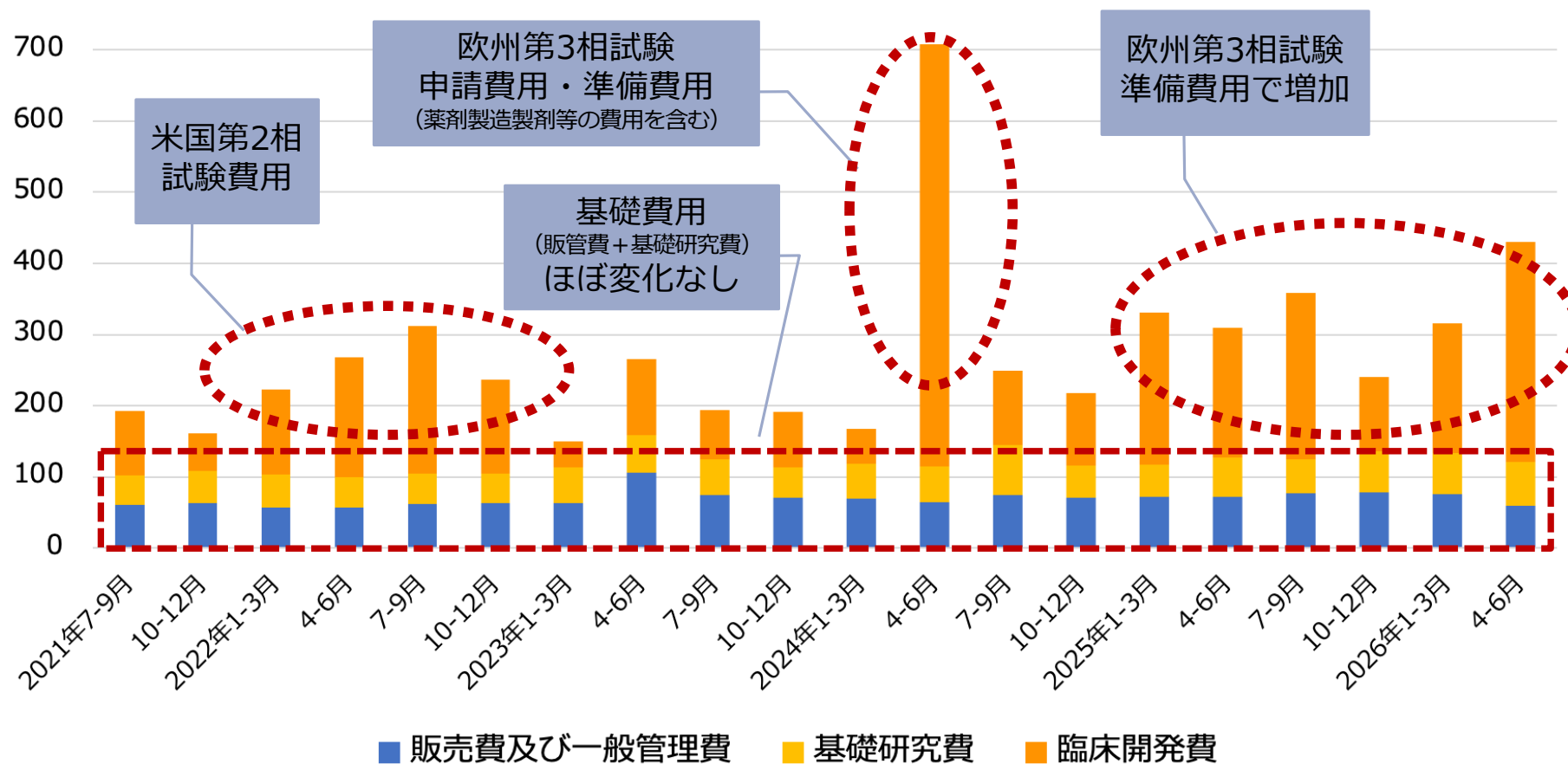
	2026年6月期	前年比	注
事業収益（売上高）	一 百万円		
営業利益	△1,358 百万円	損失増 249 百万円	
経常利益	△1,307 百万円	損失増 151 百万円	
当期純利益	△1,308 百万円	損失増 151 百万円	

*1 共通の人員・設備・消耗品等が多数あるため、基礎研究段階のプロジェクト個別の費用内訳は算出していません。

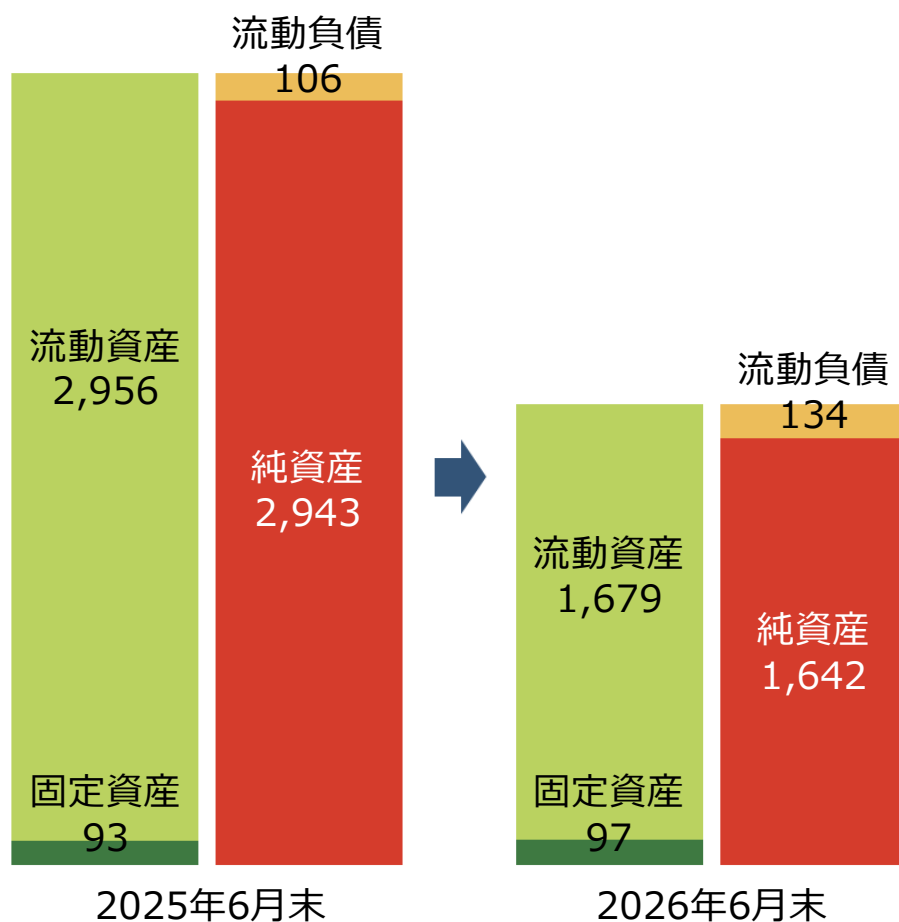
*2 臨床開発費は全額がCBP501関連の費用です。CBS9106・CBT005に関する費用はありません。

事業費用は主に臨床開発費で増減

四半期会計期間の事業費用推移（単位百万円）



2026年6月期の業績 (2)貸借対照表の推移 (単位：百万円)



2025年6月期末からの主な変化

➤ 流動資産

- ✓ 現預金 2,827 → 1,445
- ✓ 前渡金 62 → 184
- 第3四半期末（2026年3月末） 292百万円
- 薬剤製造製剤化等規制対応の進捗により第4四半期に費用計上が進みました

*百万円未満切り捨て表示のため合計などが一部一致しません。

今後の資金需要と方針

今後必要な資金と財務方針

CBP501が営業キャッシュフローに貢献するまでの資金需要

➤ CBP501臨床第3相試験・新薬申請費用

試験開始時：
現有資金で問題なし

約45-50億円

完遂までには
資金不足が想定される

新薬申請時には
追加の資金需要

➤ 基礎費用（基礎研究費＋販管費）

四半期あたり1～1.5億円

追加資本政策を検討する際のポイント

- ✓ 補助金・助成金
- ✓ 提携等に伴う入金（契約一時金・資本提携第三者割当増資）⇔ ビジネスモデル
- ✓ 株式市場からの調達を検討する場合には
株主価値の毀損や希薄化を可能な限り回避・抑制するタイミングと方法を追求

キャンバスを知る情報源

キャンバスの現状を知る情報源

- ウェブサイト <https://www.canbas.co.jp>
 - 会社ご紹介資料 <https://www.canbas.co.jp/company-presentation/>（不定期更新）
 - マネジメントブログ <https://www.canbas.co.jp/blog/>（不定期更新）
- X（旧Twitter）公式アカウント <https://twitter.com/canbas4575>
 - フォロワー7,000人超。主に個人投資家向けの情報発信/Q&Aチャネルとして定着
- アナリストレポート
 - フェアリサーチ 2025年9月8日最新版『[Phase3開始に向けて着実な歩みは継続中](#)』
 - シェアードリサーチ（随時更新） <https://sharedresearch.jp/ja/4575>
- TV・インターネット番組等出演
 - 2026年6月期決算説明会動画・テキスト（[2026年8月19日開催](#)）
 - 企業IRセミナー動画
河邊登壇 [2025年2月22日開催](#) 加登住登壇 [2026年7月7日開催](#)



■本資料に関するお問い合わせ先： 株式会社キャンバス 管理部 IR担当 Email IR@canbas.co.jp